

---

# 空き缶

るうね

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空き缶

### 【コード】

N4960K

### 【作者名】

るつね

### 【あらすじ】

夏乃は、足で空き缶を転がしていた……。

「おっせーなー」

春也が、午後の傾きかけた太陽を見上げて、つぶやく。

「服、買うのに、何時間かかるんだよ、って感じだよな」

夏乃は無言。駅前の広場のベンチ。拳ひとつ分けて、春也の隣に座っている。足の裏で、ころころとジューズの空き缶を転がしながら。

「だいたい、何で俺たちがあいつらのデートに付き合わにやならんのよ」

「初デートだからね。二人つきりだと緊張するからって、冬香が」

「じゃあ、夏乃だけでいいじゃん。何で俺まで」

「ダブルデート」

「は？」

「わたし一人だと退屈だろうから、って。冬香なりの気遣い」

「別に、俺ら付き合ってるねーじゃん」

「傍から見ると、付き合ってるように見えるみたいよ、わたしらからころころ。夏乃は空き缶を転がす。はん、と春也が鼻を鳴らした。

「いっそ、ほんとにしてみるか？」

「何をよ」

「俺ら、付き合ってみる？」

空き缶を転がす音が止まる。いつの間にか、春也の視線は下り、夏乃を見つめていた。それを感じながら、深呼吸一回ほどの間を置いて、夏乃は肩をすくめた。

「やめとくわ」

「何だよ」

「きつと上手くないかと思う。付き合い長い分、お互いの嫌なことかいっぱい知っちゃってるし」

「ま、そうかもな」

「それに、まだわたし、秋成あきなりのこと好きだから」

「さいでっか。難儀だねえ、冬香との友情の間で板挟み、か」

「そゆと」

「あん？」

「そういうところが嫌い。言わなくてもいいことを、わざわざ口にすると」

「そりゃ、悪うござんしたね」

春也は再び空を見上げた。

「あー、セックスしてー」

春也の大声に、周囲の二、三人が振り返る。

からころからころ。再び、夏乃は足で空き缶を転がし始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4960k/>

---

空き缶

2011年1月28日15時03分発行